

館蔵品展「新資料展 ー国宝指定答申記念 勝興寺関連文書を中心にー」出品目録

〔会期:令和4年(2022)11月26日(土)～令和5年(2023)1月15日(日)〕

当館では、日ごろから高岡に関わる歴史・民俗・伝統産業等に関わるさまざまな資料を収集しています。寄贈・購入などにより収集していますが、多くは市民の皆さまからのご寄贈によるものです。

収集したそれらの資料は適切に保存・管理、調査・整理しています。そして、その成果を展示や教育普及（講演・講座など）、情報公開などに幅広く活用しています。

本展では近年新たに収蔵された博物館資料を展示します。特に2022(令和4)年10月12日に国宝指定答申（12月12日指定）のあった勝興寺関連の古文書などを展示・紹介いたします。

最後に、本展開催にあたり貴重な資料を快くご寄贈賜りました、関係各位に厚く感謝申し上げます。

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
◎勝興寺関係資料						
1	勝興寺16世寂了相續 謝礼に付書状	〔宝永6年 (1709)頃〕 11月 15日	1	30.8×50.7	加賀藩寺社奉行・伊東重澄(1696～1729年 在任)、永原孝之(1696～1723在任)両名から 勝興寺宛。同寺16世寂了(常昌。1691～ 1714)の住職相續の礼を加賀前田家5代当 主・綱紀に申し上げたところ、大変ご機 嫌よく親切にして頂いたとの報告に対す る書状。月番の安房守(年寄・本多家3代 政敏カ)へも書状を送っている	当館
2	金借用証文	文久2年(1862) 5月	1	25.4×36.9	古国府(勝興寺)大仲居(宗務所)から 米屋吉次郎宛。勝興寺が米屋吉次郎から 通用金100両を借用している。勝興寺は同 年12月20日までに返済を約束している。 裏書きには原田内蔵進等5名の寺司(寺を 管理する役人。家司とも)が表書きの内容 を保証している。明治18年(1885)の米 沢吉次郎の加筆があり、「井長」へ返済 すべき旨が記されている	当館
3	「雲龍山勝興寺」 (『二十四輩順拜図 会(越中越後 三)』より)	享和3年(1803)	1	25.4×18.2× 厚1.1	浄土真宗宗祖・親鸞の高弟24人のゆかり の地(旧跡)を門信徒が巡礼するための 案内書。文章と絵が交互に掲載。巻3の 「越中越後」には、「善徳寺」「超願 寺」「瑞泉寺」「勝興寺」「東弘寺(牧 野)」などが紹介されている。現在、勝 興寺全域が確認できる最古の絵画資料で もある	当館
4	銅版画「雲龍山勝興 寺実地全景之図」	明治31年(1898)	1	33.2×45.1	非常に細かい勝興寺の全域図と解説が書 かれている。原図は『越中宝鑑』(『日 本名蹟図誌』第4編)に、解説部分は『越 中資料叢書』(歴史図書社、1973年)に それぞれ収録されている	当館
5	「三業惑乱につき勝 興寺一件」など合綴 (写)	江戸後期	1	23.2×17.0	寛政9年(1797)に浄土真宗本願寺派内で起 きた異安心事件「三業惑乱」(宗義信仰 上の論争)についての文書を中心にまと められた写本。勝興寺の覚書を中心に、 越中・加賀・能登の寺院文書が写されて いる	当館
6	『雲龍山勝興寺系 譜』	再版:大正2年 (1913)9月10日	1	23.7×16.9× 厚0.5	歴代住職の系譜や所蔵の古文書の翻刻な どが掲載。初版は明治27年(1894)。付属 の「富山県伏木勝興寺略縁起」には本寺 の創立・沿革の由来が記される	当館

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
7	佐々木泉山画・土山澤映賛《菊花図》	江戸後～明治前期	1	120.0×28.0	狩野派絵師・佐々木泉山(1834～86)と、勝興寺23代(18代とも)住職・土山澤映(1843～1906)との合作。澤映の賛には「いく千代をふるともふりし長月もけふも縄せぬ菊のことの葉」とある。加賀藩御用絵師一族の泉山と、和歌や書に秀でた澤映との交流を示す貴重な資料	当館
8	土山澤映和歌短冊《鐘声驚夢》	江戸後～明治期	1	36.2×6.1	勝興寺23代(18代とも)住職・土山澤映の和歌短冊。「鐘声驚夢／結ふともさめてかひなき夢なりと／いみなる鐘や驚かしけん」	当館
9	前田利長 利常腹痛に付見舞状	[慶長7～同9年(1602～04)] 4月22日付	1	18.0×105.7	加賀前田家2代当主で高岡開町の祖・前田利長の書状。宛所不明(医者か)。内容を意識すると「書状の内容、確かに見た。『お犬』(利常の幼名)の病気が関係者の尽力で少し良くなったとのことで、何より満足した。(さらなる療養のため)最善の方法で、宗佳(別の医者か)などに相談して完治するよう(治療は)あなたに任せる」とある。利常を大事に思う利長の思いが読み取れる	当館
10	前田利常団扇・肴受取に付礼状	年末詳6月3日付	1	19.8×56.3	小松中納言利常〔加賀前田家3代当主・利常(1594～1658)〕から光昌院〔本願寺派12世准如の6男で勝興寺14世住職・円周良昌(1624～81)〕宛。利常が小松城へ帰った祝いに贈られた団扇と肴に対する礼状。良昌が1646年に勝興寺に入った翌年、利常から寺領125石の加増を受け、同寺の寺領は計200石となった	当館
11	本願寺13世良如勝興寺の儀に付書状	年末詳9月24日付	1	19.3×113.7	浄土真宗本願寺派(西派)13世・良如(光円/1613～62)から前田利常宛。利常は本願寺派12世・准如の6男で良如の弟でもある良昌を勝興寺14世住職とし、養女を嫁がせた。内容は良如が勝興寺(弟)のことをくれぐれもよろしく頼むと利常に頼んでいるもの。もちろん弟を思う気持ちが込められているが、本願寺は金銭的に、加賀藩は政治的なつながりを目的に、お互いを求めていたことがうかがえる	当館
12	前田綱紀太刀・馬受取に付礼状	年末詳正月10日付	1	20.5×57.4	宰相綱紀〔加賀前田家5代当主・綱紀(1643～1724)〕から勝興寺宛。勝興寺から新年の祝いとして贈られた太刀と馬への礼状	当館
13	本願寺19世本如歳暮の書状受取に付礼状	年末詳12月26日付	1	20.5×56.9	浄土真宗本願寺派(西派)19世宗主・本如(1778～1827)から加賀中將〔加賀前田家11代当主・治脩(1745～1810)。1755～69年まで勝興寺在(1761～69年。13世住職・法暢)〕宛。歳暮の書状への礼状	当館
14	勝興寺17世住諦揮毫送付に付書状	年末詳12月12日付	1	35.8×51.9	勝興寺澄元〔勝興寺17世住諦(1711～42)。広開院権律師法橋。播磨国本徳寺寂宗次男)〕から内島村佐治右衛門〔1695～1765/現高岡市内島の十村(大庄屋)・五十嵐家6代)〕宛。住諦から佐治右衛門へ世話になった礼として揮毫を贈ると記されている	当館

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
15	勝興寺本堂再建に付本願寺17世法如勸募消息写(勝興寺第19世法薫筆)	天明8年(1788)9月12日付 〔原本:安永4年(1775)7月下旬〕	1	本紙27.2×186.1 全体30.5×207.4 軸長33.2	明和7年(1770)、法如10男・法薫(闡郁)が還俗した前田治脩(法暢)の跡を受けて勝興寺に入り、2代日本堂(1642年築)再建事業を継承した。本書は勝興寺の与力・末寺・惣門徒に寄付を呼び掛けた法如消息の写し。勝興寺にはこの2年前(天明6年)の同文の法如消息が所蔵される。勸募消息は近世に76通あり、多くは本願寺関係であるが、一般寺院では勝興寺のほか常楽寺(京都市下京区学林町。1338年親鸞玄孫の存覚開基。常楽台とも)・毫撰寺(福井県越前市。真宗出雲路派本山)の2例しかない。越中全域から寄付金や木材などが大量に寄せられ、藩は度々か制限や禁止措置を出さねばならないほどであったという。その結果、本史料より7年後(原本より20年後)の寛政7年(1795)6月19日に本堂は竣工した(令和4年12月12日国宝指定)	当館
◎歴史資料						
16	新川県越中国砺波郡光明寺村地引絵図	明治8年(1875)9月	1	178.0×170.0	光明寺村(現高岡市戸出光明寺)の宅地や田畑などが色分けされ、地番や面積のほか所有者の名前が書き込まれた絵図。縮尺1/600。地引絵図とは明治6年(1873)以降の地租改正によって全国で作成された地図のこと	当館 (光明寺自治会)
17	砺波郡中田組柳瀬村古田流跡川原領絵図	文化11年(1814)11月	1	120.0×160.0	砺波郡中田組〔十村・中田村(木沢)源五郎組。1825年に般若組と改名。現高岡市中田から砺波市〕の柳瀬村(砺波市柳瀬)の点々の「古田流跡川原」(庄川付替工事以前の古い田畑跡地)、緑色の「御預野」(藩有の洪水対策地)などを描いた絵図。水門や川除(堤防)なども描かれている。縮尺1/1,200。この年、柳瀬村は数年前の洪水により916石余も検地引高があり、511石余にまで草高が減ったので、その関連の絵図と思われる	当館 (土倉一郎氏)
18	砺波郡中田村源五郎組金屋岩黒村内御検地領絵図	文政3年(1820)9月	1	47.0×84.0	砺波郡中田村源五郎組(現高岡市中田の十村・木沢家が管理。1825年に般若組と改称)の金屋岩黒村(現砺波市庄川町金屋)の絵図。縮尺1/1,200。石垣の堤防、用水や道、川縁などが色分けされている	当館 (土倉一郎氏)
19	越中砺波郡境村村御印	寛文10年(1670)9月7日	1	37.4×57.7	村御印とは、江戸前期に前田家領(現富山・石川両県)各村に配布された年貢割付状のこと。砺波郡塚村(現高岡市境)の草高(標準収穫量)は114石。免(税率)は「六ツ六歩」(66%)、小物成(諸産業等にかかる税)は山役の銀148匁である	当館 (境自治会)
20	新開仮証文	嘉永元年(1848)10月	1	32.6×116.9	安田新兵衛等10名(改作奉行)から境村組合頭・石太郎等9名宛。2年間の期限付きで同村字穴山等にある6ヶ所の畑650歩(坪)程を新田開発する許可証	当館 (境自治会)
21	越中射水郡野村村御印	寛文10年(1670)9月7日	1	37.8×57.9	射水郡野村(現在の高岡市野村・中川園町・明園町・古定塚)に配布された年貢割付状。草高(標準収穫量)は1,179石。免(税率)は「四ツ」(40%)、小物成(諸産業等にかかる税)は野役の銀10匁、鮎川役11匁、油屋役3匁の計24匁である	当館

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
22	越中射水郡野村新村村御印	寛文10年(1670) 9月7日	1	37.2×57.7	射水郡野村新村(現高岡市野村)に配布された年貢割付状。草高(標準収穫量)は124石。免(税率)は「四ツ五分」(45%)、小物成(諸産業等にかかる税)はなく、本村は稲作以外の産業はほぼない純農村である	当館
23	人別送状	文化2年(1805) 3月	1	24.0×35.0	砺波郡本保村(現高岡市本保)次郎右衛門妹りへ(りえ)が、野村の清右衛門と結婚するにあたって作成された人別送状(転籍届)。嫁の家の当主(兄)から所属十村組(福田組)の十村・内嶋(内島)村孫作宛、続いて婿から所属十村組(東海老坂組。1821年に二上組)の十村・中川村善左衛門宛。内嶋村孫作は十村の五十嵐家で、9代篤好は農政や測量、国学等に優れた人物である	当館
24	高岡古御城内枯松落札に付引渡願状(後欠)	嘉永5年(1852) 10月3日	1	23.9×23.0	野村肝煎甚兵衛等3名から十村・南善左衛門宛。高岡古御城(古城公園)の郭(城内の区画)内の枯松111本の払い下げ入札に応じた野村仁八等が落札して手続きを終えたので、引き渡してほしいと願っているもの。江戸時代に城内の枯松を払い下げていた事実は新発見である	当館
25	地久子川橋流出しかかるに付掛替願状(控)	嘉永7年(1854) 7月	1	24.1×35.2	野村肝煎甚兵衛等3名から十村・南善左衛門宛。草島往来〔高岡(中川熊野神社一城東2丁目一野村小・公民館一三女子公民館)一大門一小杉一下島一草島(渡し)一東岩瀬〕の地久子川橋(御作事橋=藩作事奉行所が建設)が、今日15日の大雨で流出しかかっているため、早急に架け替えてほしいという願状である	当館
26	米買仕切書	明治15年(1882) 5月8日	1	30.2×71.7	現高岡市伏木の近代化に尽力した、廻船問屋・実業家の藤井能三(1846~1913)が発行した米買仕切書。本書は渡辺太平(御代 庄治郎)が能三から米250石(37.5トン)を諸経費込みの1,687円65銭(現在の約3,374万円相当)で購入した際に作成されたもの。仕切書(仕切状)とは北前船主(問屋)や船頭が各地の問屋との売買が成立した際に作成した文書のこと	当館
27	砺波郡絵図	明治29年(1896)	1	71.0×43.0	現在の高岡市・砺波市・南砺市・小矢部市域を含む絵図。当時の村ごとに色分けされ、学校や役所などの公共施設のほか、字名なども細かく記載されている。砺波郡は越中(現富山県)四郡(射水郡・砺波郡・婦負郡・新川郡)の一つで、明治23年(1890)の郡制施行により、砺波郡は東砺波郡(5町33ヶ村)と西砺波郡(5町38ヶ村)に分離した	当館 (藤平和子氏)
28	高橋政直(生源寺新村四郎三郎)由緒書	元禄11年(1698) 8月	1	本紙27.0×164.2 全体27.6×187.8 軸長30.5	射水郡生源寺新村(現射水市生源寺・生源寺新)開祖・高橋政直(生源寺新村四郎三郎/1609~?)による由緒書。政直の父・隼人は現高岡市域の木舟城主・石黒成綱の家臣であったが、滅亡後に百姓となる。政直は新田開発をして生源寺新村の開祖となった。その大変な苦勞を子孫が知らないのは残念であるとして、政直が書いたと伝えている。佐野村、戸出大清水など高岡市域の記述もみられる	当館 (窪池武人氏)

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
29	短刀 (銘 幸重)	室町時代	1	刃渡り26.7 反り0.5 全長36.0 鞘44.5	鎧通しという形式の短刀。太刀に差し添えて携帯したもので、分厚く鋭利で反りがなく、鎧の隙間を突き刺したり掻き切るための工夫がされている。銘「幸重 (生没年未詳)」。〔縁金〕雪山(一宮長常/1726~86)、〔小柄〕筒井包国(生没年未詳)。窪池家伝来	当館 (窪池武人氏)
30	第1回国勢調査員任命状	大正9年(1920) 7月20日	1	23.0×30.9	大正9年(1920)10月1日に実施された第1回国勢調査調査員任命状。調査員・田畑與作へ授与されたもの。資料中の「内閣」は当時の原敬内閣である	当館
31	第1回国勢調査員記念章之証	大正10年(1921) 7月1日	1	29.9×40.3	第1回国勢調査終了後、調査員・田畑與作に授与された記念章に付属する証明書	当館
32	第1回国勢調査員記念章	大正9年(1920) 10月1日	1	径2.5	第1回国勢調査で任命状とともに田畑與作に授与されたもの。表面に神武天皇の姿、裏面に日本を中心とした東アジア地域がそれぞれデザインされている	当館
33	第1回国勢調査員記念銀杯	大正10年(1921) 7月1日	1	径3.8×高7.0	第1回国勢調査終了後、調査員・田畑與作に授与された記念の銀杯(純銀製)。高岡市・加藤純古堂製	当館
34	第1回国勢調査員記念章	大正10年(1921) 7月1日	1	7.7×3.8	第1回国勢調査終了後、調査員・田畑與作に授与された記念章。青銅製メダル	当館
35	「週刊市民新聞」(37号)	昭和26年(1951) 5月20日付	1	37.8×26.7	高岡市民新聞社(島 知一氏編集)の「週刊市民新聞」(37号)。新聞1面トップ記事で当時開催中の高岡産業博覧会(会期:1951年4月5日~5月25日)の経済効果を探る記事のほか、戦後の公傷者の待遇向上を求める請願運動など当時の高岡の社会状況を巡る記事が掲載されている。「週刊市民新聞」は昭和25年から平成5年(1993)までの43年の長きにわたり発行された	当館 (狩野 勉氏)
36	高岡市利屋町「天満宮雑費明細帳」	大正12~昭和24年(1923~49)	1	12.6×18.0×厚約2.7	高岡市利屋町の天神祭(天満宮祭)の帳簿。大正12年から昭和24年の26年間にわたって、祭礼に要した諸費用や寄付された金品と人名をはじめ、戦争などにより祭礼が影響される様子や応召軍人なども記された詳細な記録。祭を盛り上げる余興では、会場の窓ガラスが割れるほどの盛況ぶりなどを伝える。利屋町の天神祭は現在、毎年5月中旬、同町の曹洞宗龍雲寺で行われている	当館 (利屋町)
◎民俗資料						
37	松郷 宏氏肖像 (「故陸軍輜重兵上等兵/松郷 宏君」)	昭和12年(1937)頃	1	—	昭和12年(1937)に日中戦争で戦死した高岡市東下関の松郷 宏氏(1914~37。享年23)の写真。宏氏は昭和7年に高岡中学校(現高岡高校)を卒業後、福井の学校で建築を学んだ。同12年1月には(株)大阪鉄工所(現日立造船(株))に入社直後、物資輸送を担当した陸軍輜重兵上等兵として出征し、同年12月に中国・上海で銃撃に遭い戦死した。宏氏の遺品32点が博物館に寄贈された	当館 (松郷誠一氏)
38	日の丸寄せ書き	昭和12年(1937)頃	1	68.5×84.0	「祈/武運/長久(ふうんちょうきゅうをいのる)/松郷宏君」。死を覚悟して出征する兵士に、友人・親戚・職場・隣近所の人たちなどが寄せ書きして贈ったもので、兵士が携行した	当館 (松郷誠一氏)

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
39	出征襷	昭和12年(1937) 頃	1	56.8×7.3	松郷 宏氏が出征を祝う壮行会の時に身に 着けていた襷。「応召軍人 松郷 宏君」 とある	当館 (松郷誠一氏)
40	株式会社大阪鉄工所 辞令	昭和12年(1937) 1月1日付	1	25.7×18.1	松郷 宏氏が(株)大阪鉄工所(現日立造船 (株)社員になった際に受け取った辞令。 同社の造機課で勤務した	当館 (松郷誠一氏)
41	金銭送付状	年未詳10月3日 付	1	23.7×16.3	松郷 宏氏から校友会長・三田村校長先生 宛。同封したお金を派遣軍人家庭慰問の ために使ってほしいと依頼する手紙	当館 (松郷誠一氏)
42	洗面具袋	昭和12年(1937) 頃	1	20.3×16.9	松郷 宏氏が携帯した洗面具袋	当館 (松郷誠一氏)
43	奉公袋	昭和12年(1937) 頃	1	31.2×21.7	松郷 宏氏が携帯した奉公袋。奉公袋と は、兵士が入営(兵役につくため兵営に 入ること)の際に軍隊手帳や召集令状、 勲章、記章などを入れておいた貴重品袋 のようなもの	当館 (松郷誠一氏)
44	図囊	昭和12年(1937) 頃	1	22.8×16.8	松郷 宏氏が携帯した図囊。図囊とは、地 図などを入れて腰に下げる革製の小型か ばんのこと。陸軍支給品	当館 (松郷誠一氏)
45	木製燭台	昭和13年(1938) 以降	2	各 高49.5× 底径10.4	愛国婦人会富山県支部から戦死した松郷 宏氏宛に贈られた木製燭台。富山市丸の 内・木本仏壇店制作。箱正面に「故陸軍 輜重兵上等兵 松郷宏殿」「贈 御霊前 愛 国婦人会富山県支部」の紙が貼り付けら れている	当館 (松郷誠一氏)
46	銅製菊花紋章(横田 小学校講堂奉安殿 用)	昭和13年(1938)	1	径34.8× 厚5.7	現高岡市立横田小学校講堂内の奉安殿上 部に掲げられた銅製の菊花紋章。初代廣 谷與三次郎作。昭和戦前、各学校には下 賜された御真影(天皇・皇后両陛下の写 真)や教育勅語などを納める奉安殿 (庫)という場所があり、上部には菊花 紋章が掲げられていた	当館 (廣谷 清氏)
47	[参考] 写真「高岡 紡績株式会社」(複 写)	明治中～大正初 期	1	—	現高岡市大町にあった高岡紡績(株)は、地 元資本のみで設立された日本海側初の紡 績工場として、明治26年(1893)に創業し た。設立発起人に菅野伝右衛門(社 長)、荒井荘蔵(常務)、室崎間平、正 村義太郎(取締役)などが名を連ねた。 同社は電灯供給事業の開始(1900年)、高 岡紡績合名会社への社名変更、日清紡績 (株)高岡工場としての再出発(1915年)を 経て、1959年の工場閉鎖まで営業が続け られた	原本：高岡市
48	看板「日清紡績高岡 工場 職工募集事務 所」	大正4年11月～ 昭和34年(1915 ～59)	1	165.0×27.5 ×厚3.8	日清紡績(株)高岡工場働く工員を募集す るため、事務所前に掲げられていた看板	当館 (高畑弘樹氏)
49	高岡城跡水堀から出 たビール瓶、牛乳瓶	明治39～昭和24 年(1906～49)	2	[ビール瓶] 口径2.5 高28.6 径7.6 [牛乳瓶] 口径4.4 高14.0 底径5.5	高岡城跡石垣(本丸一・二の丸間)東面の 水堀から引き揚げられた。大日本麦酒は 1906～49年に操業した(現サッポロビ ール、アサヒビール)。ビール瓶の下部 には「DAINIPPON BREWERY CO LTD」とある	当館

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
50	高岡駅ホーム看板 「たかおか」	大正5～昭和41 年(1916～66)	1	75.1×14.3	2代目高岡駅(1916～66)ホームに掲げられていた看板。本駅舎は大正5年(1916)9月に全面改築され、電話交換棟や荷物取扱い棟などがあり、中央改札棟は吹き抜けになっていた	当館 (狩野 勉氏)
◎美術資料						
51	二代須賀松園作《蠟 型鑄造賞牌「立山と 雷鳥」》	昭和52年(1978)	1	径9.6× 厚0.9	蠟型鑄造作家・二代須賀松園(1898～1979／国選択の記録作成等の措置を講ずべき無形文化財保持者)作。中央に雷鳥、その背面に立山がデザインされている。北陸銀行業務検定試験(外国為替3級)合格の記念品	当館 (本保澄雄氏)
52	二代須賀松園作《蠟 型鑄造額面「魁 星」》	昭和53年(1978)	1	9.4×12.1× 厚0.7	二代須賀松園が「龍」と並び得意とした「魁(魁星とも)」。「文章星」という中国の文事を司る神様で、右手には筆、左手には墨壺を持つ。北陸銀行行内論文2等受賞の記念品	当館 (本保澄雄氏)
53	和田隆一商店製高岡 漆器《宝石箱》	昭和20～30年代	1	幅26.1×奥行 19.2×高10.5	高岡市定塚町にあった和田隆一商店(現(株)雅覧堂。寄贈者父)が製作した外国人向けの輸出漆器。第7回観光土産展覧会優秀賞受賞作品	当館 (和田将典氏)
54	盾「第7回観光土産 展覧会優秀賞」	昭和20～30年代	1	29.1×23.0	「高岡塗・宝石箱／和田隆一」。主催・運輸省、日本国有鉄道、日本交通公社、全日本観光連盟	当館 (和田将典氏)
55	高畑一男作《青貝塗 唐山水平卓》	昭和46年(1971)	1	幅54.5× 奥行31.4× 高10.0	高岡市中川町出身(現井口本江在住)の彫刻塗師・高畑一男氏(1938～)の髹漆に、本市地子木町・武蔵川工房による青貝塗の合作。青貝塗とは、きらびやかなアワビなどの貝を薄く切って漆器にはり付ける「螺鈿」技法の一種。アワビ貝、夜光貝、蝶貝などが用いられる。貝を刀や針で細かい形に切り抜き、組み合わせる中国の山水・花鳥などが表現される	当館 (高畑一男氏)
56	相撲絵 3代歌川豊国 画《八戸 階ヶ嶽龍 右衛門》	江戸後期(1847 ～52年頃)	1	36.2×24.9	現高岡市戸出出身で幕末に大関(当時の最高位)まで昇った力士・階ヶ嶽龍右衛門の相撲絵(浮世絵)。これは階ヶ嶽が八戸藩のお抱えだった時期に描かれたもの。回し(締め込み)や化粧回し姿ではなく普段の姿で描かれ、菊紋に堅縞の派手な着用に黒羽織を纏い、両刀を帯びている。作者の3代歌川豊国(1786～1864)は江戸後期の浮世絵師。美人画などに優品が多く、生涯に描いた作品数も大変多い	当館 (柳澤一夫氏)
57	相撲絵 3代歌川豊国 画《階ヶ嶽龍右衛 門》	安政元年(1854)	1	36.4×24.4	力士・階ヶ嶽龍右衛門(1817～68)の相撲絵(浮世絵)。回し(締め込み)や化粧回し姿ではなく普段の姿で描かれ、藍と白を基調とした縞模様の派手な衣装を纏い、右手に扇子、左手に手ぬぐいを持ち両刀を帯びている	当館 (柳澤一夫氏)
58	堀川敬周筆《紙本著 色束帯天神座像》	江戸後期	1	本紙104.7× 40.0 全体184.4× 52.0 軸長57.4	高岡初の町絵師・堀川敬周(1789頃～1858)が描いた束帯姿の天神(菅原道真)座像。本紙右下部に落款「敬周写」と、朱文方印「公載／氏」の印章がある。高岡近郊では、男児が生まれると母親の実家から天神様が贈られ、正月に飾る風習がある	当館 (木村玉喜氏)

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
59	藤井能三筆 和歌短冊《雨中菊》	明治後期	1	36.2×6.0	現高岡市伏木の近代化に尽力した、廻船問屋・実業家の藤井能三(1846～1913)の和歌短冊。「雨中菊／ふる雨のしづく(雫)も千代の 香りして／盛り久しき 庭のむら菊」	当館 (佐藤充彦氏)
60	筏井竹の門画《蒲公英図》	大正期	1	本紙55.6×54.5 全体128.1×57.5 軸長63.3	近代高岡文芸の盟主で俳人・俳画家の筏井竹の門(1871～1925)が描く蒲公英図。本紙左端に落款「竹の門生」とある。竹の門の俳画の作品数は8,000～12,000点ともいわれる	当館 (木村玉喜氏)
61	筏井竹の門画・筏井嘉一賛 和歌短冊	大正期頃	1	35.8×6.0	筏井竹の門と、息子で歌人の嘉一(1899～1971)の合作短冊。魚を入れた籠を掲げる海女と大根が描かれた背景に、賛「おのづから 涙は垂れて すべなしや／病みの小床に 眼はつぶれども」がある。裏には嘉一の歌「入りつ日に きらりと光る ビイドロの／なかに泳ぎて さびしき金魚」がある	当館 (須賀正紀氏)
62	梅田年風筆《俳諧百一首図屏風》	江戸後期(1832年前後～1846年9月)	2	本紙 各扇 131.9×54.9 全体(表具含む) 各隻 173.3×350.7	加賀藩の御用絵師で俳人の梅田年風(8代久栄。1791～1846)筆。俳諧の百人一首ともいうべきもので、松尾芭蕉以下著名な俳人百人の肖像画とその秀句を描く。加越能の俳人35人中、越中では9人が選ばれている。落款から「是々雅」(不明)の求めに応じて描いたことや、現高岡市戸出の俳人・尾崎康工(1702～79)の大ベストセラー『俳諧百一集』(1765年)に倣って句を選び、絵は与謝蕪村の「遺図」を元に描いたことがわかる	当館 (吉田 清・節子氏)
63	[参考] 尾崎康工編『俳諧百一集』	明和2年(1765)刊	1	27.3×19.0	越中砺波郡戸出村(現高岡市戸出)出身で越中を代表する俳人の一人・尾崎康工が編纂した俳書。康工が松尾芭蕉以下全国の俳人百人の秀句を選び、自ら描いた肖像も掲載。大変好評を博し、版が重ねられ、嘉永3年(1850)には普及版が出版されるなど大ベストセラーとなった	当館 (尾崎安治氏)

※資料保存のため、一部展示替えをすることがあります。

※複写物の寸法は割愛しました。

計63件66点

(公財) 高岡市民文化振興事業団 高岡市立博物館 (富山県高岡市古城1番5号)
TEL:0766-20-1572 FAX:0766-20-1570 <https://www.e-tmm.info>